



司祭館の外から

たまには？ 司祭館から
出なくては…。

今年の夏、フィリピンの南の島、ミンダナオ島に行つて来た。二回目。ダバオというフィリピン第二の都市から車で二時間。キダパワンという町の郊外に「ミンダナオ子ども図書館」がある。「図書館」といっても本がいくつかある施設ではない。本ではなく、子どもたちがたくさんいる。六十人ほど。小学生から大学生まで。日本の善意の方々から奨学金を得て学校に通っている田舎から出て来た子どもたちだ。貧しくて、また、家庭の

事情で自宅から学校に通えない子どもたち。イスラム教の子も



読み語りを聞く子どもたち

いれば、キリスト教の子もいる。いろんな民族の子が集まって共

同生活をしている。「勉強は好き？」と聞くと、皆「もちろん！」と答える。朝食を準備する当番さんは、朝4時過ぎには起きてご飯を炊く。他の子どもたちも早起きだ。6時の朝食前には掃除と洗濯を済ませている。世界中、いろんなところを旅したが私が一番気に入っているところだ。ここには本当の平和がある。この子どもたちは週末ともなればボランティアに出かける。四輪駆動の車でやっと行けるような（ときには途中で車を降りて、本の入った大きな箱を担いで）小さな村を訪れ、その子どもたちに読み語りをする。子どもたちが子どもたちを助ける

ボランティア。今回も彼らに同行させてもらった。

どこから集まって来るのかぞろぞろと何十人も子どもたちが集まって来る。親も、おじいちゃんも、おばあちゃんも…。始めは歌や踊りで楽しい時間。落ち着くと、読み語りが始まる。子どもたちは目を丸くして聞き入る。英語やタガログ語や現地言葉で絵本が読まれる。さすがに現地の言葉で読まれるときは反応が違う。目の色が違う。思った。私たちは余計な物を持ちすぎている。手と足と口と：体があれば充分楽しめる。心から楽しめる。自分自身、生身の人間であることだけで、温か



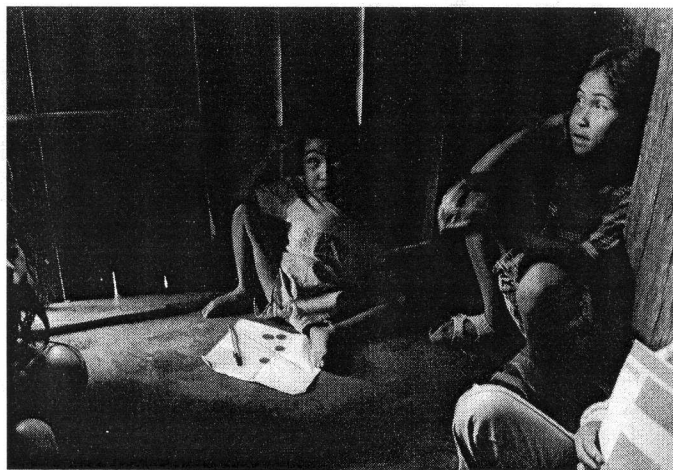
やまもと まこと
山元 眞 神父

い交流、コミュニケーションができる。子どもたちの笑顔のすばらしいこと！表情の豊かなこと！眼の輝いていること！日本では、もはや見れなくなつたすべてがここにはある！心の素直さ、美しさ、思いやり、寛大さ、忍耐、希望…。

山奥のきれいな滝がある広場での読み語りが終わった後、「ミランダナオ子ども図書館」に来ている奨学生の子の実家に寄つた。

電気もない小さな村。マノボ族の村だ。案内されて「狭い戸口」から入ると、小さな家の土間に体の曲がった小さな細い男の子が座っていた。十歳。弟だった。同行した子どもたちで狭い家がいっぱいになった。一人の子が私に場所を空けてくれた。私はその子の正面に座った。その子は明るく大きな声で歌をうたってくれた。よく透る澄んだ声。眼をしっかりと見開いて歌っている。竹ひごのような細い棒を定規のようにして使い、白い紙にしっかりと線を描き描いてみせてくれた。

少し離れたところには十八歳の兄も土間にしゃがみこんでいた。完全に足も腰も首も曲がっている。二人とも生まれながらのポリオだという。



狭い戸口から入ると

でいる。その子たちの温かいまなざしが、その家をいつそう温かくする。この貧しい家には救われた人がいる…。

イエスが町や村を巡って教えながらエルサレムに向かって進んでおられたとき、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一同に言われた。「狭い戸口から入るように努めなさい…」。

マノボ族の一軒の貧しい家。その「狭い戸口」から入ったところは愛に満ちていた。そこには救われた人たちがいた。

「愛といつくしみのあるところ。神はそこにおられる」。

キリスト教もイスラム教も、あらゆる宗教も、あらゆる民族も越えて：愛のあるところに神がおられ、そこに救いがある。宗教、宗派、民族、貧富の差などあらゆる差別が神との出会いを邪魔している。司祭館から出て子どもたちと過ごした貧しさの中での日々は、時間のない永遠の愛の世界にいたようだった。

「ミランダナオ子ども図書館のホームページをご覧ください」



株式会社 吉本洋紙店

本店 〒104-0041 東京都中央区新富2-7-4

☎03(3551)4141(代)/2143 FAX03(3551)3939

厚木支店 〒243-0807 神奈川県厚木市金田1017

☎046(223)6931

FAX046(223)6930